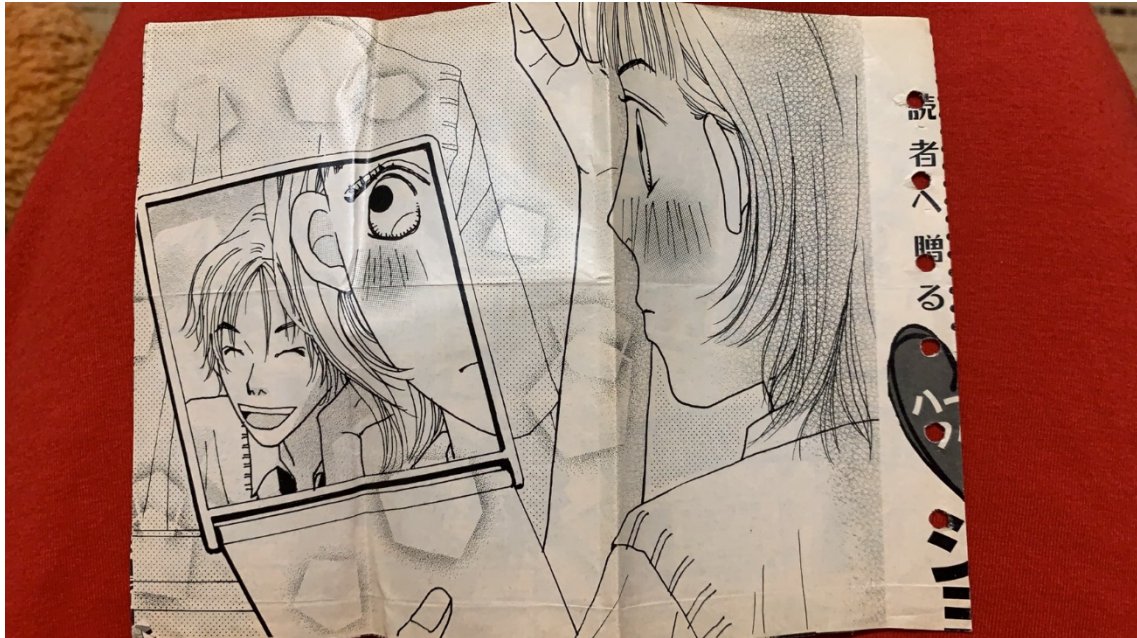


作品名：一つ前の席（真田亜衣）



そんな私は臆病者。もしかがみの世界があるならば、私は飛んでゆきたい。  
それならきつと私はもつと勇氣ある女の子。  
あ、でもかがみの世界なのだから、私はあなたが太キライなんだ。もしかしたら出会っていないのかもしれない。私の存在さえも知らない。そんなの悲しスギるね。  
それなら今、この世界でいいかな。  
今日も私はあなたのひとつ前の席。  
そこで私はかがみをとりに出す。  
髪を直す私。  
何も知らず笑うあなた。  
少し怖いけど、いつかこの思い、かがみの反射の光と共に君に届け――。

『一つ前の席から...』 P.N.: 真田亜衣  
あなたのひとつ前の席。  
そこで私はかがみをとりに出す。  
髪を直すフリしてあなたを見てる。  
かがみのせくといつもあなたがいる。  
うつたり、いなくなったり。いろんな表情を私は知っている。  
でも少しはすかしい。もしそこであなたと目が合ったら...? どうしよう?  
だからいつも髪を直すのはほんの一瞬。それでも満足してしまう。本当なら後ろを向いて、  
「宿題やった? 見せて!」って、  
言ってみたいのに。  
こんなに近くで同じ授業をうけているのに。

眠っていた 20 年前の作品に息吹がふきこまれた

【真田亜衣さんとの共作】

## はじまりの予感

新学期が始まった

下駄箱から教室までの距離が長いな

教室に入ると何人か視線を感じた

一学期と同じクラスなのになんか違う

みんな大人になって自分だけ取り残されたみたいだ

窓側の後ろから 2 番目

自分の席

よかった

ちゃんとあった

座ってみると途端に感覚が戻ってきた

そうそう想像してきた教室はこんな感じだった

窓からみえる校庭

ざわめく

クラスメートの声

目の前の席の生徒がイスに座る

そうそうこの眺めだ

彼女はひと夏越えて、少し髪が伸びていた

けどここに座ってくれるだけでなんだか懐かしい

かばんから手鏡を持ち出し髪をとかしはじめた

一瞬、鏡越しに目があつた気がした

ずっと見ていたのバレたかな？

嫌がられたかな？

違う違う親しみを感じただけなんだから

「おはよう。2学期もよろしく。」

照れくさかったけど

思い切って声をかけた

ふりかえってこっちをみてくれた

何かが始まる予感がした

そうだ。

2学期が始まるのだった！

突然

「おはよう。2学期もよろしく。」って

始業式。

突然後ろからかけられた声に、心臓が止まるかと思った。

なんならまだバクバクしてる。

1学期の終業式以来の鏡越しの彼は、だいぶ日焼けして黒くなっていた。

海とか行ったのかな。

夏休み何してたんだろ…。

一瞬、鏡越しに目が合った気がして、

どうしよう、バレちゃった？！

そう思った時、

そんな風に声をかけられて、

びっくりして思わず振り返った。

「う、うん！」

出てきた言葉はそれが精一杯。

鏡の世界の私なら、もっと上手く答えられたのかな…

しかも私今顔真っ赤じゃない？！

耳、後ろから見えて赤いのバレてないかな？

はああ…せっかく話しかけてくれたのに…

でもでも！話しかけられちゃったよー！！

落ち込みながらも、にやけてしまうのを必死に隠す変な顔の私(しかも真っ赤)をよそにチャイムが鳴る。

先生が来る。

教室に入るだいぶ手前…もはや廊下から大声で私たちに彼は言った。

「おーい、席につけ〜！

HR 始めるぞー！

まずは席替えだ〜！！」

そうだ。

2学期は席替えから始まるのだった

「住めば都」っていうけど、席もそれとおんなじだ

ここがよかったなあ

「目悪いやついるかあ。それ以外の例外はなしやぞ」

席替えの結果、一つ前の席になった

一つしか変わらないのに、なんか違う

みんなガヤガヤと楽しそうにしているけど、自分だけが蚊帳の外にいるような疎外感

「あれ？」

机のなかを整理しようとしていたら

なにか入っている

手鏡だ

そういえば上石原さんはどこにいったんだ？

クジ運のなさが悲しい。

アイスだって、いつもお兄ちゃんばかり当たって私はいつもはずれだし。

いや、でも1学期はクジ運よかったのか。

いやいや、そんな事はもうどうでもいい。

神様、1学期に戻してー！！

端から反対側の端に移動した私の席。

中田くんとは席が離れてしまった。

教室の真ん中辺りの端と端。

1列違えば隣だったのに!!!

と、よく分からない可能性を惜しむ。

「はいはい、移動出来たかー？」

落ち着けー！

次はお待ちかね、文化祭の実行委員を決めるからな！」

「えー、誰かやれよー」

「やだ、やりたくない〜」

ざわつく教室の中、

私はそれどころではなかった。

鏡がない…

前の席に置いてきちゃった？！

遠く、

教室のすごく遠くの端で、

クラスメイトと笑う中田くんの姿が見えた。

困ったら笑ってしまうのが中田くんの癖だ

(鏡よ鏡、鏡さん この鏡をどうしたらいい？)

女子のものを自分が持ってしまうている

この現実の中田くんは、困っていた  
そして、笑ったような顔になっていた

文化祭の実行委員を決めるホームルームが始まり、誰もやりたがらないし、誰かに押し付けるわけにもいかないから、教室は長らく静まり返っている

(盗んだと思われても嫌だしな。上石原のモチモン 持ってるって誰かにバレて冷やかされるのも嫌だ。いやいや、それよりも上石原さん、手鏡がなくなって困ってるんじゃないかな?)

そんなこんなを逡巡している間に、先生に名指しされた

「中田！やるか？」

ぼーっとしてたのが気づかれたのか？

ヤバイ!!

思わず、反射的に勝手に反応して声が出た

「はい」

一瞬、間があり

「おーっ!!」

教室がどっと湧いて、拍手の嵐

しまった  
と思ったが後の祭り

「よおし、男子は中田に決定、あとは女子」

「みさと！中田くんやるんだって、みさと立候補しなよ！」

「へっ？」



全く聞いてなかった…  
それどころじゃないんだって。  
だって鏡が…

「先生～！みさとがいいと思いまーす！」  
へっ？

「お、上石原どうだ？」  
「え？！ちょっと、芽衣！」

「私もみさとがいいと思う！」  
えええええ!!!!!!

「推薦者が2人もいるんじゃ、こりややるしかないな、上石原！」

私が返事をする前にパチパチと拍手をし始めたのは、私の前の席になった仲良し3人組の芽衣。  
それに続いたのは、察しのいい…いや、悪知恵の働くのがもかだ。

いつしか教室中の皆が拍手して、  
「じゃ、決まりだなっ！  
来週何するか決めるから考えとけ～」  
先生は嬉しそうににんまりした。

ちょ ちょ  
ちょっと待ってよ～

どうということ？  
私と中田くんが文化祭委員

一学期は、まともに顔も見れなくって、鏡越しにみて、喜んでただけなのに

どうしたらいいの？

(休憩時間)

「み～さ～とっ  
私に感謝しなよっ  
今度、タピオカ(タピオカ)おごってね」  
と芽衣

「決まったのは、私の推薦だからね 私はラポールのママイクコでフェースパックお願い  
ね＊□」  
と、もか

「なに言ってんのよ  
結局、先生が決めたんだからね～  
情熱ホルモン食べ放題よろしく～」

「もう、先生までなに言ってるんですか～」

こういうのは、ゆっくりゆっくりっていうのが大事なんだから

急展開すぎたら、叶う思いも叶わないじゃないっ

始まりのお話

「迷った…」

1年生の1学期も終わろうとしているのに、  
まだ校内が覚えられない。

「芽衣に待っててもらえばよかった…図書室ってどこー…」

面白い本を見つけたからと、放課後行く約束をしたのに、運悪く日直で、芽衣には先に行ってもらった。

「だいたいなんで2階歩いてたのに3階になるの、この学校」

坂の上の斜面に校舎を無理やり増築したらしく、2階が隣の校舎の3階に渡り廊下で繋がっていたりするのだ。

「芽衣余計待たせちゃうなあ…」

っ!!!…いったあ!!」

3階の突き当たり、そこは1面鏡だった。

「き、気付かなかった…」

誰も見てないよね…

「大丈夫??笑」

「111(0 Δ 0)111」

「めっちゃぶつかってたけど…」

「だ、だ、大丈夫大丈夫大丈夫、あははっ、こんなところにかっ、鏡あったんだね、図書室探してたらこんなとこきちゃってあはは、ぶつかっちゃってびっくりしてあはははは」

人生で初めてこんな早口で話してるんじゃないか。  
恥ずかしい…穴があったら入りたいとはこの事…  
笑われてるし…

「図書室反対側やで」

「えっ？そうなの？！ありがとうございますっ」

「あ、ちょっと待って！」

「？」

「窓の外見てみてよ！」

「え？…うわぁ〜!!!キレイ〜！」

「そうやろ？この学校で1番気に入ってる景色！」

そういつて笑う名前も学年も分からない男の子は、海に沈んでいく真っ赤な夕日を身体中に浴びて、キラキラと輝いていた。

2年で同じクラスになって、初めて同級生と知るのだけど、きっと彼は覚えていないだろうなあと、話しかけてもいない。

ただ、それから好きになるのは一瞬だった。

彼の笑顔はあの日の夕日と同じくらい輝いていたから。

(1週間過ぎてしまった…)

また中田くんは笑ったような顔になっていた。

すなわち、困っている。

文化祭の委員にされて(自業自得?)、あの日はそれどころじゃなくなって、それから何度か話しかけようとしたものの、ずっと友達と一緒にいる上石原。

(長野と白石にバレたら何言われるかわかんねえ…)

そんなこんなで1週間過ぎてしまった。

(委員会の時なら返せるかな。あ、今日出し物決める日やっけ？嫌やなー…)

ますます笑顔になっている事に気づかない中田くん。

そして HR。

「今日は文化祭の出し物決めてもらうぞ！じゃああとは～文化祭委員！よろしく！」

席をたち、自信なさげに教壇に向かう二人

チラッと、中田をみる上石原

中田は、少しだけうなずいて  
意を決したように司会をはじめた

「では、このクラスでの文化祭の出し物を決めたいと思いますが、まずはアンケート結果を  
発表します

合唱            4名

演劇            5名

模擬店          8名

意見なし    10名

委員一任    13名

(このアンケートには委員の意見は含まれていない)

です

中田は、笑顔で続ける

委員一任という意見が一番多いですが  
皆さん、ほんとに委員で決めてしまってもいいんですか？

(上石原)

え？中田くん そんなこと言っちゃったら...

クラスメート A

異議なし

クラスメート B

1組はリア王するって言ってたし、2組は、合唱するらしいので、その2つはやめたほうがいいと思います

長野

たいへんかもやけど

委員の二人に考えてもらったら私はそれに従います

と言って上石原のほうに目をやり舌を出す

(上石原)

もう、芽衣！

(中田)

わかりました。では、委員で話し合ったわけではないので僕の勝手な意見になるかもですが  
ぼくが考えた出し物を発表します

僕らの中学校を中心にした立体的な地図模型を作りたいと思います

どうですか？

教室が静まり返った。

(うわ、やってしもた)

いいと思ったのにな一、と思いながら中田くんはうなだれた。

その時。

「…と思う…」

「え？」

「いいと思う！私賛成！」

隣に立つその女の子は、さっきまで人前に出るのは苦手ですと言わんばかりに下を向いていたのに、キラキラした目でこっちを見てそう言った。

「おいおい、上石原は委員だろ」

思わず先生がツッコミを入れた。

「だって素敵だと思ったんです！この学校、変な作りだけど、そこが他の学校にはない魅力でもあるし！皆で頑張って完成出来たら、この変な作りの学校のこと好きになれそうだなって！」

「みさと…変な作りって2回も言ったよ…」

白石につっこまれている。

「あ、えっ？あ、ごめんなさいっ！」

教室が笑いに変わる。

「確かに迷子になるよね、この学校」

「模型で作りが分かれば迷子減るかもよ！」

「大変そうだけどやってみたいかも！」

「俺そういうの得意〜」

「ドローン飛ばそうぜ！」

「いいね〜！先生ドローン用意出来る？」

「そりゃ無理だろ」

発案者のはずが取り残された中田くん。

隣にも、勢いよく賛成したものの取り残された女の子。

でも、次第にその子は笑顔に変わった。まるで自分の意見が通ったみたいに喜んでいる。

ドキン

中田くんは、この感情が何かまだ知らない。

各学年、各クラスの

文化祭委員が集まってそれぞれの出し物が発表され正式に決定した

(翌日のHR)

最近では、3Dプリンターでも作れるらしいし、プロは金型作って作るそうです

でも、予算もないし

みんなのお家にある廃品のダンボールやプラスチックゴミなんかを使って作りたいと思います

地図は、平地はゼンリンの地図、山の地図は国土地理院の地図そして海の地図は日本水路協会の地図を使いたいと思います

え？海まで？

そうです 変な作りの学校が魅力なのは海があつてのことなんで

チラッと横をみて笑う中田

恥ずかしそうな上石原

クラスメート (笑)

ちょうどちにアロワナを買ってた大きな水槽があるんやけど、父さんが使っていいって言ってくれたんで、それでジオマップみたいなものが作れたらいいなって思ってます

なんだか中田はやる気マンマンになっている

中田くんがキラキラしている。

それにひきかえ、みさとがした事と言えば、学校を変な作りだとディスったことだけ。

私何もしてない…

みさととは焦っていた。

そんな時。

「ジオマップじゃ教室展示には寂しくない？」



クラスメイトからそんな声上がる。

「確かに。他にも何か必要だね」

みさと

「写真はどうかな？」

ジオマップを使って写真を撮るの。こだわった小さな小さな部分をクローズアップして撮ったり、小さな世界の私たちと本物の私たちを比較したり。あとは作成中の皆の写真も貼ったりして。」

「なら教室を美術館にしようよ」

「絵も書いていいかな？」

「黒板飾るのやりたーい！」

みさとの発言から、皆が次々と案を出して、ジオラマを中心に教室中を展示でいっぱいにすることが決まった。

「上石原！」

中田くんだ。

「展示の写真なんだけどさ、多分うちの父さんがカメラも貸してくれると思うんだ。よかったら今日うちに見にこない？」

みさとはびっくりしすぎて何も返せない。

「えっ、行く行く！」

横にいた芽衣がすかさず答える。

「お！じゃあ長野と白石もおいでよ！坂本と森田も来るって言ってるし。」

「OK！じゃあ放課後ねー！」

放課後一。

5人とはある…お店の前にいた。

「え、あってる？」

「ここ…だよな？」

「中田くん、この角って言ってたもん…ね？」

「角ってここしかない…よな？」

一SKY 探偵事務所一

「「ええ?!」」

あらあらあ  
あなたたちい  
いらっしやあい

息子ちゃんから聞ってるわよお

坂本っちゃん  
森田ちゃんは  
しょっちゅうきてるからいいとして  
今日はかわいらしいうさびょんたちも一緒じゃな〜い

みさと  
(え?え?中田くんのお父さんっておねえなの?探偵事務所も気になるし、もうわけわ  
からない)

息子ちゃん、初顔のうさびょんたちを紹介しなさい

うん。長野さんと白石さん、そして上石原...

あらあ あなたがミサトちゃんなのね  
息子ちゃんからうわさを聞ってるわよお

ミサト  
え?噂?

父さんのトークに引っかけたらだめだよ  
一緒に文化祭の委員やってるって言っただけやから

あらあら。なにかがはじまるって、きっかけが大事だったりするのよ〜  
みさびょん 息子ちゃんをよろしくねえ

中田くんのお父さん…

いや、中田姐さんはひととおり私たちを把握すると、

「水槽とカメラならガレージにあるからあんたたちにとって来なさいよ～

私たち女子はガールズトークするんだからあつ♪」

と言って女子(?)4人はテーブルを囲んで座った。

「で、みさびょんはうちの息子ちゃんでしょ」

「へっ？」

「めいめいは森田ちゃんでしょ」

「えっ?!」

「もかっちは…もしかして先生だったりする？」

「「はええええ?!」」

「ななな、何言ってるんですかっつ、違いますよ!!」

「そそそ、そうですよ、みさととはそうだけど私は違いますっ」

「えっ!私も違!……くないです…」

「あっら、みさびょんかわいい～♡

あんたたち2人もみさびょんみたく素直になりなさい!女はね、素直に甘えてこそかわいいのよ!若いんだから自分の気持ちに正直に、ね!」

中田くんたちが水槽とカメラを持ってくると、中田姐さんはカメラの使い方を丁寧に教えてくれた。

「お邪魔しました～!」

「うさびよんたち、いつでもまた来てね、ガールズトークしましょ♡」

「父さんはガールじゃないだろ」

「何よ、気持ちは乙女よ!素直なかわいい乙女です～!ねっ、うさびよんたちっ♡」

男子と分かれ3人になったみさとたち。皆何から話せばいいか分からなかった。

でも、中田姐さんは的確にみさとたちを見抜いていたようだった。

やられたわぁ

完全ペース握られた～

探偵しか勝たん

でもミサト

中田くんのお父さんと中田くん以上に急接近やね～

私らとちごて  
素直なんがよいらしいからよかったねえ

違うっていえん  
オーラがお父さんにはあったわ

ミサト もうお父さんっていうてもうてるやん（笑）

ああ なんか違う  
おもとんと違う方向に進んでいっとる～

一方男子チーム

中田のオトンって  
オネェなん？

いや、カメレオンみたいで、状況に応じて自由自在  
イカツイおっさんにすごまれたら  
それはそれでものごつつう凄み返しとったで

掴みどころがないなあ

まあそういう職業らしいわ

ふうん

それより、この水槽でかすぎて  
学校までもって行かれへんな

学校まで軽トラで運んでもらえん？

（森田）  
おとんに頼んでみるわ

こうして文化祭の準備は粛々と進んでいく

### 【森田と芽衣のお話】

昨日中田姐さんに、森田が好きなんじゃないかと言われて酷く動揺してしまった。

みさとともかにはそうだったの？！って問い詰められるし。

別に隠してた訳じゃない。

いや、隠してたっていうか好きとかそんなんじゃないし！！

幼なじみの腐れ縁なだけやし！

「あ、芽衣ちゃん！おはよーさん！」

「おじさん、おはよー！」

あれ、何しとるん？」

「何しとるんって芽衣ちゃん。あんたらの文化祭で使う水槽運びに行くんやないか。」

「あ、そうなん？ありがとう！」

「おい、健！まだか！」

「はいはい、今行くやん。」

お、長野。お前も乗ってくか？」

「なんやお前、こないだまで芽衣ちゃあん〜ゆうとったくせにえっらそうに」

「そんなんゆうてへんわ」

「いや、ゆうとったゆうとった」と、芽衣と森田父。

森田父の軽トラに乗せてもらって SKY 探偵事務所へ向かう。

私と森田は荷台だ。

「昔よく 2 人で乗ったなあ〜」

芽衣が話し出す。

「勝手に乗ってて怒られたよな」

「あれはあんたが乗りたいっていうから付き合っただけやん」

「そうやっけ？お前が乗りたいがってたんやろ」

「ちゃうわ！」

「てかお前こそ俺のことたあくんゆうとったくせに今はあんたやもんな、可愛ないわあ」

「はあ〜？！私のかわいいかわいいたあくんはもうどっか行ってしまったんやっ。」

「なんやそれ。ずっとここにおるわ！」

”素直になりなさい”

中田姐さんが言った言葉が頭をよぎったけど、姐さん、私には難しいみたいです。

「はいよ、着いたで」

「「はい」」

「よっこいしょ。うわあつ。」

荷台から落っこちそうになった芽衣。

「おい、大丈夫か？」

「大丈夫大丈夫、あぶな～」

「ほんまお前はドジやな」

「あんたに言われたないわ」

「ははは、ほら、行くで、芽衣」

「はへ？」

言葉にならない言葉が出たその後、派手にコケたことはその後しばらくいじられることになるのだけど…

「大丈夫か…？」

「あんたのせい！たあくんのせい！バカ！」

「なんやねん、ほら」

差し出してくれたこの手が、これからもずっと隣にありますようにと願った私は、彼をとてとても好きみたいです。

文化祭らしくなってきた

どのクラスも、授業が始まる前から早出

合唱の音が聞こえてくる

演劇のセリフの声も漏れてくる

ミサトたちのクラスでは中田くんが髪の毛ボサボサのままみんなに設計した立体地図を披露する

中田くんは、ここ数日、ろくに寝ていないらしい

みんな、これをもとにあらかじめ決めていた担当ごとに製作にとりかかってください

設計に加えて総指揮も中田くんが担当する

あらかじめ陸担当、学校担当、海担当はそれに写真担当が決まっていた

陸班は、班長岡田準一

学校班は、班長宮沢えり

海班は、班長森田

写真班の班長はミサトがそれぞれつとめる

いっせいに作業を開始した

授業前、休み時間、お昼休み、放課後、家に持ち帰り

みんな一生懸命に頑張っている

あっという間に時は過ぎていく

学校班と陸班は、山の地形図を使って標高ごとに切り取り立体的に作っていく作業を黙々とこなす

ダンボールを使うのでなんとか形になっていくが海班はそうは行かなかった

海図のうち、港泊図を使って水深を切り取っていく作業は、陸班と同じ

しかしダンボールが使えない

中田くんの設計では海は水をはることになっている

ダンボールでは濡れてしまうためアクリルを使っの作業になるため簡単に切り取れない

作業は難航し、まったくはかどらない

この作業、終わり来るん？

ぜんぜん進まへんのやけど～

時間が経つにつれ、愚痴がこぼれ和が乱れ始めた

作業が連日続く。

中田くんは班長たちを集めて教室から出て行った。  
その後だった。

「もうこれ終わんねーよ！」  
海班の高岡がもう無理だと声を荒らげた。  
「もうちょっとやし頑張ろうよ」  
「もうちょっと？あー、そっちは陸で簡単やもんな！こっちは全然終わんねーよ！」  
「簡単？」  
「こっちに比べたら簡単やろ」  
「皆頑張ってやっとなや！簡単とか言うな！」  
陸班・猪原(いのはら)までもが声を荒らげだした。  
その時、班長の岡田と森田が帰ってきた。  
「え、何？どうしたん？」  
「高岡くんが怒りだしちゃって」  
「俺のせいだよ！」  
「いや、そんなことゆってないよ…」  
「お前らの計画が悪いからこんなことになってんじゃねーの！どうせ班長だけ抜け出してサボってたんやろ」  
「なんやって？」  
高岡に掴みかかる岡田。  
「おい、やめとけよ！」  
ガラッ  
残りの3人も教室に戻ってきた。  
「えっ？何？」  
みさととえりがそう言うのと、皆もそう思うのは同時ぐらいだった。  
「みっなさあ〜ん♡いつも息子ちゃんがお世話になってまーす！」  
「ちょっと中田さん、そのキャラは抑えましょうよ」  
「あら、いいじゃなあい、宮沢さん…ってあれ？何してるの？ケンカ？いやん、もう若いっていいわね〜、こう見えても昔は私もよくケンカしたのよ〜、あらあなたもあなたもガタイいいわね〜、どう？うちがやってる空手道場に来ない？」  
「「い、いや、大丈夫です…」」  
「そお〜？残念。あ！そうよ、私お手伝いに来たんだったわ！さ、皆やるわよ〜！」

一瞬にしてその場をおさめた？中田父。  
中田父と宮沢父は趣味のプラモデル仲間らしく、なかなか進まない作業のアドバイザーとして手伝いに来てくれたのだ。



中田父、もとい中田姐さんに圧倒された皆は、何事もなかったかのように作業に戻ったのだ  
った。

「おかまがきた。

中田父はおかま。」

そのよく分からない現実を受け入れられないまま。

ねえねえ しょうゆちゃん

高岡に声をかける中田父

は？俺、ソースケですけど

ソースもショーユもかけるものには違いないじゃない

しょうゆちゃん？

それよりも宮沢パパと相談して PTA プラモデル同好会からプレゼン持ってきたわよ

宮沢パパ！あれ海猿のみんなに見せたげましょう

宮沢パパは、廊下においていた円柱型のものを肩に担いで持ってきた

なにこれ？

ふふふっ 軟質塩化ビニルシートよ

息子ちゃんが、しょうゆちゃんチームが悩んでるっていったから、宮沢パパと相談して持  
ってきたのよ

これなら、ハサミでジョキジョキ切れるから作業もスイスイよ～

あっ、ありがとうございます

いいのよ気にしないで

それより早く作業を続けなさい

しょうゆちゃん、大切なものを大切にできる仲間を作んなきゃだめよ～

ねっ、ミサピョン★

大切なものを大切にできる仲間…

みさとは中田父が言った言葉を思い返していた。

私の大切なものってなんだろう。

小さい時から集めているガラスの小物たちは宝物。

だけどそういうことじゃないよね。

お父さん、お母さん、お兄ちゃん…芽衣、もか…好きな人…

そこまで考えて1人でつい赤くなるみさと。

「ちょっとみさと、何？いきなり赤くなって」

芽衣はするどい。

「え？なんでもない、なんでもない」

「変な妄想してへんと、早く写真取りに行こ！」

「妄想なんてしてへんし！

あ、ちょっと待って！」

パシャ

「え、何なん、いきなりー」

「大切なもの撮ったの！」

「えー、どういうこと？」

「また写真が出来たら話すよ～」

芽衣がみさとに笑いかけている奥には、頑張って作業するクラスメートたち。もちろん中田くんも写っているのだけど…。

大切なもの。

この時間だ。

かけがえのない今この時間。

それを皆が大切に思ってくれればいいな。

みさとは気付いていないのだけど、その写真のさらに奥には笑い合う岡田、高岡、猪原の姿が写っていた。

圭、オレ学校班に代わってもええか？

と、森田

え？でも自分海班の班長やん！

大丈夫！ソースケが自分で自分に追い込みかけとるし、おまえの父さんのおかげで目処が

たってきた

でも、何で？

う、うん

宮沢が、いろいろ悩んでて

学校班なら、順調やん

そうなんやけど、あいつミニチュア写真家の田中達也さんに影響うけとるらしくって、細部にまでこだわりたいんやって

(でも、何でお前が)

と、言おうとして、中田くんは言葉を呑み込んだ

二人のことは、うすうす知っている

でも、長野の気持ちを考えたらとも思ったけど、いまはこの流れに身を任せることにした

高岡を呼んで海班長を引き受けてもらった

高岡は、水を得た魚のようにやる気 MAX になった

もかは、サボって隣のクラスよ様子をみに行っていた

担任の滝沢先生は、大学で演劇部にいたらしい

その頃は、主役がはれるくらいの役者だったらしい

今は、演出に取り組んで熱心に生徒を指導している

カッコいい

うっとりするもか

森田が学校班に変わったことは、早速芽衣の耳にはいつてきた

「芽衣、この写真なんだけど…」

みさとが話しかけるも、芽衣は答えない。

「芽衣？」

「え？あ、何？」

「あ、うん、この写真なんだけど…」

写真班も、あとはジオラマの完成を待つのみというほどに準備は順調に進んでいた。

「上石原！ちょっといい？」

中田くんだ。

みさととは最近ようやく中田くんと普通に話せるようになった。

「あ、うん！芽衣、またあとで相談させて！」

「はいはい。」

あれ？芽衣なんか怒ってる…？

「この写真の構成なんだけど…」

中田くんと話しながらも芽衣の事が気になる。

チラッと目をやる。

睨んでいる…

こっちをものすごく睨んでいる…

「な、中田くん…芽衣が…めっちゃ睨んでる( ; A ; )」

「あ、うん、俺やと思う」

「え？なんで？」

「ちょっここっち来て」

中田くんはみさとの手を掴み教室から出る。

(ううわあああああ)

みさととは心臓バックバク。

廊下に出て階段の踊り場まで出たところで中田くんが急に手を離した。

「あっ、ごめん！」

「え、いや、全然、そんな」

「あ、えっと、そう、森田！あ、じゃなくて長野！」

「あ、そうだね、うん、芽衣！」

「実はさ…」

中田くんは森田が陸班に写った経緯を話してくれた。

だからとはいえ中田くんを睨むのは間違っている。

「でも本当に森田くんの事好きなんやなあ…」

「でもこればかりはどうにもならんからな」

「中田くん！いっぱい思い出作ろうね！もし、誰かが付き合ったり失恋したとしても、この文化祭は、皆が楽しかったと言えるような文化祭にしようね！」

「そうやな！楽しく頑張ろな！」

恋の行方は誰にも分からないけど、ジオラマの行方は、完成へと着実に進んでいる。

隣のクラスの滝澤先生が喜多川校長に呼び出された

なんで先生なのに呼び出されるの？

もかが説明する

滝澤先生、ワイヤー使ってフライングする計画があったらしく、それを校長から止められてるみたい

準主役のケント役の堂本くんが、コーデリア姫を助け出すときにどうしてもやりたいらしくって堂本くんもノリノリなんだって

そりゃ学校側からしたら安全面配慮せんなんし、そんな危ないことはやめてほしいやろな

でも、滝澤先生カッコいいと思わへん？

生徒の気持ち全力で受け止めて

劇の内容も、中学生の演劇とは思えない仕上がりになってるらしいよ

合唱は、ヒゲダンの宿命と米津玄師のアイネクライネやるらしいで～

むっず～

他のクラスからも、時折うちのクラスに偵察に来とるなあ

クラスのみんなが文化祭の話題でもちきり

それを聞いていた猪原が割り込んできた

他のクラスで宮沢さんの作品がすごいつて言うてたで

なんかお菓子と人形とか使ってディズニーみたいになっとるって  
それに森田が加わって最強コンビ....

ちょちょいちょい

もかが猪原を遮る

うつむく芽衣

「あいつら最近いい感じやんな〜付き合ったりしてな！」

「ちょっと猪原、もうあんたどっかいきー！」

「なんやねん、うるさいなあ〜」

3人に沈黙が続く。

遠くでは宮沢さんと森田が楽しそうに話していた。

「いや〜でももうすぐ準備もおわりそうやね！」

「そ、そうやね！間に合わんかと思ったけど良かった〜」

意を決して話し始めたもかにみさとが続いた。

「気、遣わんでいいよ」

「「え？」」

「もかもみさと、自分らは楽しそうやん。私になんて気遣わんでいいよ。もう、ほっといて！」

そして事件は放課後に起こった。

ざわつく教室。

「どうしたの？」

「宮沢さんが作った人形が壊されたらしいで」

「え？ひど。誰がこんなこと…」

「今から直して間に合う??」

「いや〜ちょっとヤバいんちゃう？」

宮沢さんが悲しそうに俯く傍らで森田は必死に励んでいた。

そして猪原が突然口を開く。

「さっき長野さんが人形の近くにいるの見たんやけど…」

一斉に皆の視線が芽衣に向いた。

「え？私知らな…」

「おまえやったんか！何てことすんねん！」

森田が芽衣に向かっていく。

「私じゃない！」

泣き出す芽衣。

「ちょっと待って森田くん！」

みさとともか、中田くんも加わって止めようとするも森田の勢いは収まらない。

「宮沢さんがどんだけ頑張って作ったと思っとなや！」

「だから私じゃないってゆっとるやん！」

ついに芽衣は教室から出ていった。

森田くん、なんてひどいこというのっ

芽衣がそんなことするわけじゃないじゃない

芽衣は、さっき私のところにこれを持ってきてくれたのよ

ものすごい剣幕で森田をまくしたてたのは、みさとでももかでもなく宮沢さん

そして手にしていたものは

付箋

それも手作りで形を整えてある

学校内の案内板用に使ってって芽衣が私のところに持ってきてくれたの

班でもない芽衣が、私のこだわりを一番理解してくれている芽衣がそんなことするはずない！

だいたい、あんたが近くにいるとこみたなんていうから悪いのよ

学校班の萩野朝香が猪原を詰める

ションボリする猪原

それに

と宮沢が続ける

なんか私と森田くん噂になってるみたいだけど。そんなんじゃないから

私、誰にも行ってないけどこの文化祭おわったら転校するの。だからどうしてもこの作品みんなと一緒に作って成功させたいの

森田くんは、不要になった古着や古道具、野菜からお菓子までなんでも調達してくれるから

頼りにしてるの  
班まで代わってもらって

じゃあ誰が

と話してる矢先

教室に鳥が侵入してきた  
ヒヨドリだ  
そして作品に向かって一直線  
どうやら食べ物で作ったところに好物があるらしく、獲物を狙うだけでなく、人形たちを壊  
して飛んでいった

犯人はあいつだ

森田は打ちひしがれていた。  
芽衣を犯人と決めつけた。  
宮沢さんからはまくし立てられたうえに関係はなんでもないと言われた。  
「森田、ほら謝りに行くで！」  
中田くんが声をかける。

空き教室の隅でうずくまる芽衣をみさとが見つけた。  
「芽衣！」  
「みさととおお！ひっく、私ひっくじゃない、ひっく…」  
「うん、皆分かっとなよ、大丈夫！」  
みさととはことの一部始終を伝えた。

「やっと思つた！」  
中田くんと森田がやってきた。  
「ほら、ちゃんと謝れよ」  
中田くんが森田にそう言って、みさとと中田くんは教室から出た。

「ちゃんと仲直り出来るかな？」  
「大丈夫やろ、あの二人昔から両思いやからな」  
「え？！」  
「自分らで気づいてへんだけやし。森田、なんか宮沢さんにフラフラいきよったけど、1番



大事にしとんは長野の事やし。やのに長野が人形壊したってなって動揺してあんなことやってしまっただけや。」

「芽衣も、中田くんの事は睨んでたんじゃなくて、ふせん作っと思って寝不足やっただけらしいよ。まあそれでちょっとイライラもしとったみたいやけど、芽衣も何か手伝いたかったんやろうね。」

「もうあほ2人やな」

「うん（笑）でも羨ましいな。」

「\_\_」

一瞬、中田くんは何かを言いかけてやめた。

翌朝、何事もなかったかのように楽しそうに人形を直す森田と宮沢さん、そして芽衣。芽衣に謝罪した猪原も加わり、もか、荻野、坂本も手伝っている。

「ありがとうとごめんねは大事やね」

「人間の基本やな」

そう話すみさとと中田くんの背後から、宮沢さんが話しかける。

「あら、嘘や隠し事も大事よ。」

この秘めた思いは、何十年か後に叶うことになるのだけれど、それはまた、遠い未来のまた別のお話。

文化祭当日の朝は  
学校全体が濃い霧に  
包まれていた

クラスメート全員早出して水槽を体育館に移動した

海班班長になった高岡が、水槽に水を注ぐ

勢いよく注ぐのではなくゆっくり注いでいく

みんなが見守ること数十分

オーッ

一堂ため息

若狭湾を臨むロケーションが自慢の学校を象徴するような水と森に包まれた学校を見事に表現できている

こんなん、自分らができる思わなかった

映える～

宮沢さんは泣いている

つられて女子が涙する

男子も数人泣いている

キーーーーーッキーーーーーッ

ヒヨドリが近づいてきた

また、水槽のなかのドライフルーツでできたアートを狙っているのだ

森田くんと猪原が、ヒヨドリを追い立てる

こら～

お前のせいで、お前のせいで～

みんなが大笑い

芽衣も笑っている

それを見て、中田くんも笑った。

ミサトと目が合って頷いた。

目だけで伝わるものができた。

大切なものを大切に思える。そんな瞬間。

外は霧が晴れてきた

雲海だぁ

と誰かがいう

いや、ほんまの海やし～

そっかぁ

みんなが笑う

この学校でよかった。そんな朝だった。

喜多川校長、生徒会長の挨拶が終わり、各学年色んな出し物が始まっていく。

「次は1組やでっ！滝澤先生の勇姿を見に行かなっ！」

キラキラした目でもかがみさとと芽衣を誘う。

「いや、滝澤先生でえへんやん」

「ちゃうやん、滝澤先生が監督した演劇やからこそ見に行くんやん」

「そういえばフライングするって件どうなったん？」

「ふふふー、まゝ見といたら分かるわゝ」

演劇が始まり、ついにケント役の堂本くんが、コーデリア姫役の今居さんを助け出すシーン。

「え、やったの?!」

「いや、違うマネキンやん」

「めちゃくちゃリアル!!!」

「美術部の子が堂本くんそっくりに作ったらしいで」

大盛況で劇は終了した。

「いやー、やっぱり滝澤先生はすごいなあ、かつこいいなあ～」

余韻にひたるもかの近くで、他のクラスの女子の声が聞こえてきた。

「あのマネキン、らぼーるのママイクコから借りてきたらしいで」

「え、なんで？」

「滝澤先生の彼女がママイクコの店長さんらしい」

「え?! 滝澤先生彼女いたん?」

「ちょちょちょちょ!!!何その話!!!ほんまに???

もかにいきなり話しかけられた2人は困惑しながら

「あ、うん、滝澤先生本人がゆうてたからほんま…やと思う…結婚…するみたいやよ」

「…ま、じ、か…」

マネキンを飛ばすという情報は仕入れていたものの、マネキンの入手先までは知らなかったもか。

「私としたことが…」

落ち込むもかにみさとと芽衣が話しかけようとしたとき。

「決めた! 私滝澤先生に告白する!」

「「は??」

「いや、別にいいねん、彼女いはるんは。でもこの気持ちは大事やろ? 伝えな意味無いし、こんなに好きなん知って欲しいし! それでキッパリ先生の結婚祝福する!!

じゃ、行ってくるね!」

残されたみさとと芽衣。

もかのそういう所が好きだなあと思いながら、果たして自分は…と、考え込むのだった。

勢いこんで愛しの滝澤先生のもとへまっしぐらのもか

でも、足が止まった

目線の先には、滝澤先生とママイクコの人談笑している

あの人、ママイクコでよくみる

いつも優しく笑顔を浮かべて、テキパキとしてて、しかもかわいい

そっかママイクコの店長ってあの人のことか

先生!

滝澤先生に近寄るもか

おっ白石

滝澤先生は軽く右手をあげる  
隣で、微笑むママイクコの店長

めっちゃ感動しました  
すごい演出!  
筋書きが難しくてようわからなかったけど引き込まれました

ははっ ありがとう  
それ、今居たちにいうたって 喜ぶわ

はい わかりました  
おめでとうございます

ん？

いえ、ジャニー校長に反対されてたフライング  
できてよかったなあって  
あんなの学校でできるなんて  
なんだかよくわからないけどそれだけで胸がいっぱいで

気丈なもかの目に涙が溢れてきた

ありがとうございました

もかは、お辞儀をして、ママイクコの店長に一瞥し、踵を返して、教室に戻っていった  
廊下が妙に長く感じた

教室に戻るともかがミサトのもとにとびついて泣き崩れた  
芽衣も髪をなでる

合唱の歌声が、こもれ聴こえてくる

official 髭男 disg の宿命だ

心臓からあふれ出した声で～

歌うメロディ  
振り向いた未来  
君から溢れ出した声と合わさって響いた 群青の空の下

まるでかのかの気持ちと歌が合わさっている  
違うのは、空の色だけ

今日はほんとに天高く馬肥ゆる秋の空

(誰もいない教室)

「あれ、中田らどこ行ったんやろ」  
思えばこの1ヶ月。  
宮沢さんには告白もしていないのにフラれ、無実の芽衣を疑ってクラスメイトからは総ス  
カン。

「いいとこなしやな…」  
1人ポツリと呟く。  
「あれ、森田くん。何してるの？」  
宮沢さんだ。  
「宮沢さん、ほんまに引っ越すん？」  
「うん、明後日には東京に。」  
「そっか…淋しなるな」  
「森田くん。皆の前であんな事言っちゃってごめんね。ずっと謝りたかったんだけどタイミ  
ング逃しちゃって。」  
「そんなんいいよ」

傷を掘り返さんといってくれ。  
「でも…森田くんの事ずっと見てたから分かる。森田くんは芽衣をすごく大切に思ってる  
よ」

何を言い出すんや。  
「芽衣をよろしくね、あの子ほんとはすごく優しくて人の事ばかり考えてるから。芽衣  
泣かせたらビンタしに東京から戻って来るからね！」  
「なんやそれ」  
「じゃあ私ジオラマチェックしてくるね！バイバイ！」  
「お、おう！」  
なんや、なんでいきなりあいつの話…

森田は気づかない。  
精一杯の宮沢さんの告白。  
そのバイバイに深い意味がある事にも。

俺があいつを大切に？そりゃ大切な幼なじみやけど…

ふと目に入った展示写真。  
芽衣が笑っている。  
その裏で微笑んでいる自分。  
そんな写真が何枚も、何枚も…。  
え？なんで俺…  
そういえば、あいつがしてた事全部俺知ってる…  
ふせんの時かって、あいつずっとあの時期なんかめちゃくちゃ眠たそうやったな…写真班  
で人一倍動いて全員の写真撮ろうとしてたことも。  
まさか俺あいつのこと…？！

(中庭)

「芽衣、あのね、私気づいちゃったの」  
「え？何に？」  
「森田くんが芽衣の事ずーっと見てる事」  
「はえおあえ？」  
「写真展示作っててね、芽衣の後ろにやたら森田くんいるんだよね。しかもニコニコしながら芽衣見てるの」  
「な、なにそれ?!」  
「写真、見てきてみなよ」  
芽衣が走り出す。

ずっとずっと幼なじみだったから、怖かった。  
この関係のままでいい。  
一緒にいられなくなるくらいならこのままで。

体育館から聞こえる合唱曲はアイネクライネ。

♪消えない悲しみも綻びもあなたといれば  
それでよかったねと笑えるのがどんなに嬉しいか  
目の前の全てがぼやけては溶けてゆくような  
奇跡であふれて足りないや  
あたしの名前を呼んでくれた  
あなたの名前を呼んでいいかな

「たけ…」  
芽衣がそう呼びかけるのを遮るように森田の声が響く。  
「芽衣！」  
体育館ジオラマ展示会場では  
宮沢さんが囲まれていた

地方新聞記者や役所の広報などが、ジオラマの噂を聞きつけてきたのだ

私たちは、小高い丘に位置する学校から見下ろすことのできる海、周りの山に囲まれた環境  
のなかで育まれているんだということをみんなでジオラマをつくることで改めて実感する  
ことができました

優等生宮沢さんらしいコメントだ

目から涙がこぼれる。涙のほんとの意味は、記者たちには伝わらないが、記事にするには十  
分な涙だ。

展示されている写真は、ジオラマを引き立て補ってあまりあるものになっている

学生服を着た若者が  
校内、海、山の風光明媚写真にとどまらず近隣施設などで、地域の人たちと楽しそうに活  
きと撮れていて美しい

仲間の作業風景も秀逸で屈託のない笑顔が、カメラマンをも唸らせていた

これもわたしのカメラで撮ったのよ～

それにこの海中すごいと思わない～？



アイデア出したの、あたしなんだから  
ちゃんと記事にするのよっ

それはちょっと

いやねえ 冗談よ～

輪のなかには、なぜか中田パパもおり、  
カメラや水槽が自分のものと鼻高々だ

でも取材で固くなった中学生たちを和ませる役割を果たしている

みさとは、取材の輪にはいなくて、そんな様子を遠目で眺めていた

中田くんは、文化祭委員として、取材を見守っていたが、班長たちが主役だといって取材には応じなかった

ふと、遠くにいたみさとに気づいた

歩み寄る中田くん

上石原さん、この後の文化祭委員会が終わったら、もう一度ここに来てくれない？ 待ってる  
んで  
ねっ！

それだけいうと、振り向き際に軽く手を上げ、足早に元の場所に戻っていった

中田くんに後でまた来るように呼ばれた。

何だ、何だ。

どうしよう。ドキドキする。

「あの一、この写真撮ったの君だって聞いたんだけど…」

急に知らない大人の男性が話しかけてきた。

「キャー！！！」

「ちょっと、みさびょん！！大丈夫っ？！あんた何っ？うちのみさびょんに何したの  
っ？！」

中田父や芽衣たちもみさとの叫び声に駆け寄ってきた。

「いやいやいやいや。怪しい者じゃありませんよ。僕新聞社でカメラマンをしている東山と言います。彼女の撮った写真がとても良かったので、コンクールに出さないか打診しようと思って声をかけたんですよ。」

「えっ、すごーい！」と芽衣。

「ほんとにそうかしら？」と中田父

「えっ、すみません、ごめんなさい、申し訳ありませんっ！」とみさと。

「ほんとですよ！！この写真です。ちょうど今《青春の1ページ》というコンクールがあって。どうかな？」

「え、私の写真！あの時のやつ！」と芽衣。

「ぜひ！」と言ったのはもか。

それを遮るように中田父が言う。

「ダメよ」

「え、どうして？」

「正確に言うと、この写真はダメ。その他の写真ならいいわ。だってその写真…もう違うコンクールに応募しちゃってるもの〜？」

「「はあああああああ？？」」

「いや、こないだね、ちょーっと教室にお邪魔したらすーごく素敵な写真があったから、ちょーっとカメラからデータを借りて、市内の写真展に応募してみたのよ〜？私の予想じゃ、入賞は間違いないわね〜♡」

「え、いいやん、みさと！」

「いや、姐さんそれ窃盗」

「あら、人聞き悪いわね、借りただけよ」

「…えっと…東山さん！」

「え、はい？」

みさとが話し出した。

「そのコンクール、応募させて下さい！」

「え、でも他のコンクールに出した写真は…」

「締め切りっていつですか？」

「来週の金曜だよ。」

「それまでに違う写真を用意するので、少し待って貰えませんか？」

「そういうことならもちろん構わないよ！」

「ありがとうございます！中田姐さん、もうしばらくカメラ貸してもらえますか…？」

「いいに決まってるじゃない〜♡いい写真期待してるわよ〜♡」

パシャ

早速写真を撮り始めてみたみさとだったが、

「どうしよう…口から心臓出そう…」

1人思わず呟く。

頭の中はもう、中田くんと約束の事でいっぱいだった。

こんなじゃとてもいい写真なんて撮れない。

いや、だって色んなこと起こりすぎて。

でも自分でやりたいって言っちゃったし、やりたいのはほんとだし。

なんだか自分の周りの時計だけがすごく早く進んでいるような気がする。

中田くんの事は結局芽衣やもかに相談出来ないままだ。

ファインダー越しに中田くんを見つけた。

あれ？笑ってるけど、困ってる。

パシャ

…中田くんの笑顔の写真撮りたいな…

そう思いながら、そんな写真なんて撮れないよと、自分から湧く期待を押し込む。

そして委員会の時間を知らせるアナウンスが流れた。

委員会は、終始和やかなムードだった

演劇も合唱もジオラマも

どのクラスも結束力が高まり、例年にない盛り上がりを見せ、どの担任の先生も鼻高々

出し物にそれぞれのクラスの特徴があり個性があり、この短期間で成長がみられました  
ユーたち最高

喜多川校長は、短い言葉ながら賛辞を送った

委員もそれぞれ学園祭の総括を発言する

みさとは発言することはなかったが中田くんの感想を噛みしめ、心に刻んだ

学校周辺のジオラマをつくる

そしてカメラを通して町や暮らしそしてありのままの仲間の姿を映し出す

無謀にも思えた挑戦でしたが、想像もしていなかった仲間の力が引き出せました

ときには不穏な空気も流れたこともありましたが、完成に近づくにつれ、価値観を共有でき、  
より仲間意識が高まりました

担任の近藤先生は、何も口出しすることなく温かい眼差しで見守ってくれました  
でも、本当は地域の人たちに声をかけてくれたり、父兄と密に連絡をとって足りないものを準備してくれていたのはみんな知っています  
この場をお借りして感謝申し上げます  
ありがとうございます

いつもひょうきんな近藤先生

中田！俺のことはええんや  
もっともっと褒めろ

委員のみんなが笑った

近藤先生は、笑いながらも目頭が熱くなって無造作に腕で拭った

一緒に委員会にでていたはずの二人

なのに別々に約束の場所に向かっている

2学期はじまる前のようによそよそしい二人が約束の場所の前にたどり着いた

委員会であんなに立派に発言していた中田くん  
なかなか言葉を口にしない

もどかしいが、それでこそ中田くん

そんな気もする

沈黙がつづく

体育館の窓は茜色に輝きはじめている

その光に照らされて  
ジオラマも夕日に染まる

あの…

ようやく中田君が言葉を発した

うん

みさとも声をふりしぼる

あの…席替えのとき、上石原さんの手鏡が机のなかに残ってて、それをずっと渡しそびれて  
て、なんかタイミングっていうか  
そんなのがみつからなくて…

みさとも必死で否定する

あっ こちらこそ ごめん

ふたたび長い沈黙

ジオラマの水面がキラキラしている  
ペーパークラフトで作った船もゆらゆらしている

ぼーっ

汽笛がなった

それはほんものの海から聞こえてくる汽笛

ここみてる？

え？

中田くんが指差した先には、ジオラマの2つの校舎の2階と3階が渡り廊下で繋がって

る3階のほうの突き当りのところ

あっ！

みさとは思わず少し大きな声が出てしまった

一面が鏡張りの柱

そこにみさとの手鏡が使われている

宮沢さんをお願いして使わせてもらったんだ

山も海も校舎も光に包まれる瞬間がみられる一番気に入ってる景色がみられる秘密の場所

はじめてあったの

ここだったよね？

「覚えてたの？！」

「いや、ごめん、ほんとはあの時の女の子が上石原さんだとは気づいてなかったんだ。」

そう言って中田くんは笑った。

困った時の笑顔だ。

「森田と長野がケンカした時、あの教室の近くを一緒に通って気づいたんだ。」

「あ…」

そう言えば中田くんは何かを言いかけて止めた時があった。その時だったのかもしれない。

あの時の事を覚えていてくれた。

私だと気づいてくれた。

それはすごく嬉しい。

けど、あんな派手にぶつかった事を覚えられている。

恥ずかしくて、みさとは何も言えなかった。

また沈黙が続く。

「うわぁ…」

沈黙を破ったのは中田くんだった。

体育祭の窓から差し込む夕日は、ちょうどジオラマの学校を同じように照らし、まるであの時みたいに輝き出した。

「キレイ…」

みさとも声をあげた。

2階を歩いているのに、3階にたどり着く。

本当に変な作りの学校だ。

だけど、そんな学校だったからこそ、中田くんに出会えた。

だからこそ、こんなに素敵な文化祭になった。

「文化祭、ほんとに楽しかった。皆もそう思ってくれてるかなあ…」

「もちろんじゃな〜い♡」

「ちょっと中田姐さんバレちゃうから！！」

体育館の外では、中田父、芽衣、もか、森田、坂本がこっそり中を伺っていた。

「ああああ、緊張する〜!!!」

「思ってるよ！少なくとも俺は、すごく楽しかった！上石原さんと委員で良かったって思ってる！」

「…ありがとう」

嬉しすぎて、気持ちがあふれそうになる。

好きだと言ってしまおうか。

でも、そんな事を言えばまた、

彼をあの笑顔にさせてしまうのかもしれない。

上石原さん

行こっ！！

えっ？

あの場所へ行こう！！

返事をするまもなく

中田くんがみさとの手をとって走り出した

ひっぱられながら

あわててみさとも駆け出した

おおー

いきなりの展開に二人を見ていた一堂は  
うなり声をあげる

ひゅー

冷やかすものもいる

そんな声にも目もくれず展示場になっていた体育館から一目散に目的の場所へ突っ走る二人

きっと手に汗かいてる～

心のなかではずかしがるみさと

中田くんは構わずより強く握ってくる

あっという間にふたりの場所に到着

わああああ

みさとが感嘆する

ぎり間に合った～

手を離してガッツポーズする中田くん

校舎から見下ろす海一面で大群のうさぎがとび跳ねるように波打って生きもののように海面が煌めいている

もう一度ここに来て、この景色を一緒にみたいなって思って

中田くんはそういうとおもむろにポケットから何かを取り出した

まだ夏の名残がのこり浅黒い顔をした中田くんが輝いてみえる



上石原さんののは、ジオラマに使ってしまったから同じものと思って

両手を添えてそっとみさとに手渡した

手鏡だ

みさとの頬に涙が伝った

どうしても声にならず、かわりに精一杯首をたてにふる

受け取った鏡を開くと夕日があたり、中田くんとみさとの胸のあたりで光を放った

オレンジ色は、秋空とともにゆっくりと闇色に近づいていった

(一ヶ月後)

学校ではふたりの噂でもちきりになっていた

あの日

夕日が沈んでいくなかふたりをみていた人がいた

中田父でも、芽衣でも、もかでも森田でも坂本でもなくその人物は東山だった

東山のカメラは、手鏡が光を放つ瞬間を逃さずカメラに収めていた

そのときの写真が記者クラブカメラグランプリを受賞したのだ

タイトルは「はじまりの予感」

そう あれから一月が経っている

ふたりは…

(完)